

障害児援助における家族の重要性について

清水 健司・海塚 敏郎

(受付 2000 年 5 月 10 日)

【序 論】

障害児を持つ家族に対する支援策を検討していくための研究が注目されるようになったのは比較的最近のことである。主な研究は1970年代以降になって発表されているのが現状であり、どうしても障害児本人の陰に隠れて前面にでる事が少なかったのである。障害児を持つ家族の研究は歴史が浅いことは否めないが、日本でも活発に調査研究がなされるようになってきている（渡辺，1997）。

及川・清水（1995）は、心理学および障害児教育分野における家族研究について親の心理的な適応過程である障害の受容過程に関する研究と親子研究に関するものの二つに大別して、家族研究を概観し研究の問題点や今後の課題についての検討を述べている。

親の障害の受容過程に関する研究とは、障害児の養育の主体である親の内面的変化に視点を当てたものである。障害児を持つ親たちは、わが子が障害児であることを知ったときの初期ショックから徐々に立ち直り、次第に子どもに対する教育的配慮や努力へと向かい、やがてその子が自分たちの人生にとって何者にもかえがたい存在へと究極的には昇華されるといわれている。しかし、障害という現実を変えることは極めて困難であり、変革が養育者自身に一方的に求められることもあり、新たな価値観の形成には長期にわたって苦悩が付きまとうものである。三牧（1998）は、我が子が障害を背負って生まれてきたことを医師に告知されることへのショックは計り知れないものであると述べ、大切なことは家族への配慮だが、とりわけ母親への配慮が必要であるとしている。また、実証的な研究として倉

重・川間(1995, 1996)は、母親の障害受容を「母親の我が子の障害に対する態度」と操作的に定義し、その態度を感情的成分、認知的成分、行動的成分の3成分から説明されるとして自らが質問紙を作成して、さらに調査を実施してその結果「我が子の持つ障害の特性」、「時間的推移」、「対象児を取り巻く環境」に関する要因が母親の障害受容に影響を与えていることを示唆している。

また、親子研究に関するものとしては、そのなかで親の養育態度に関する研究と親のストレスに関する研究の大きく二つに分けられる。親の養育態度に関する研究としては、肢体不自由児養護学校に在籍する生徒の母親に田研式親子関係診断テストを用いて調査を行ったところ消極的拒否型と矛盾型が多く、厳格型、期待型、干渉型が少ないという知見を報告したものがある(木船・深田, 1977)。

そして、親のストレスに関する研究であるが、ストレス尺度としてHolroyd and McArthur(1976)は、Questionnaire on Resources and Stress(QRS)を開発し、さらに簡易型である(QRS-SF)も作成している。また、そのほかにもQRSの簡易型である(QRS-F)が作成されている(Friedrich & Greenberg, 1983)。

障害児を持つ家族は、障害児を持たない家族と比較して、多くの負担を負うと考えられることが多い。このような負担は、家族構成員の中でも親に多くの困難やストレスをもたらすことが明らかにされてきた(新美・植村, 1981; Erickson & Upshur, 1989; 中野, 1993; 稲浪・Rodgers・小椋・西, 1994; 北川・七木田・今塩屋, 1995; 田中, 1996)。しかし、障害児を持つ家族は、障害児を家族に持たない家族よりも多くのストレスを経験しているとは一概に言えないことを示唆する報告もあり、過去の知見において全くの一致を見ているわけではない。

また、障害児を持つ家族が直面するストレスの原因には多くの要因が考えられ、障害児本人の発達段階によって異なることが考えられる。橋本(1980)は、肢体不自由児と知的障害児を持つ家族について障害の診断時頃

から小学部入学前後の頃までの間を6段階に分けて、遡及的にストレスの時間的推移を調査したが、肢体不自由児を持つ家族と知的障害児を持つ家族には有意な差は見られなかった。これによりストレスの時間的推移においては、一般化したものは適用できないとしており、障害の発生から長期にわたっての介入が必要であるとしている。それに対して、新美・植村(1984)は、障害児の加齢にともなう因子構造の変化を調査したところ母親が7因子中5因子、父親は6因子中4因子が、共通する因子と判断されて、ほかの因子については障害児の加齢にともなって因子構造に変化が見られることを指摘した。また、植村・新美(1985)は、自らが構成した尺度を用いて3～4歳・5～6歳・小学1年～2年・小学3年～4年・小学5年～6年・中学1年～2年・中学3年の7段階のグループに分けて知的障害児を持つ家族と自閉症児を持つ家族のあいだで分析を行った結果、「人間関係から生じるストレス」は両障害とも推移はなく「障害児の問題行動から生じるストレス」は学齢期後に増加して中学部入学と同時に減少する推移を示し、「将来への不安から生じるストレス」は学齢期前に非常に大きく、小学部入学とともに減少していく推移を示し、「日常生活における自己実現の阻害から生じるストレス」は学齢期以後大幅に減少するという推移を示すと述べている。

また、すべての障害児をもつ家族が同様にストレスを経験するわけではなく、種々の要因が影響をおよぼしていると考えられる。そのなかで、とりわけ障害の程度については、一般的に重度であるほどに家族はより多くの負担を強いられ、家族ストレスが増大すると見られることが多い。ただし、障害が重度である方が、かえって早期に親や家族の障害受容を可能にし、現実に即した態度変容を可能にする場合もあることが指摘されている(渡辺, 1997)。例えば、障害の種別の違いにおいて稲浪・西・小椋(1980)は、Holroydが開発したQRSを用いてそれぞれ自閉症児、知的障害児、肢体不自由児、盲児を持つ家族に心理的なストレスの調査を行った。その結果、自閉症児群が「拒否的態度であること」や「障害児の活動性の欠如」

や「障害児の人格上の問題」や「自己の心身不健康」や「障害児に時間がかかりすぎる事」や「過保護である事」の因子において他の 3 群よりも高いストレスを感じているということを示していた。また、肢体不自由児群が、「経済困難」や「身体能力の障害」の因子において他の 3 群よりも高いストレスを感じていることも示していた。そして、渡辺 (1997) は、障害それ自体の程度や内容も重要な要因としてはたらいっていることもさることながら、障害によって派生する家族生活への実質的な影響の度合いにも着目する必要があるのだと述べている。彼は、障害児を持つ家族に伴う障害児自身へのケアの困難さやそれに費やされる時間や労力の程度、そして、それらによる家族自身の日常生活への変化や制限の程度によって家族の適応バランスは左右されやすいとしている。過去の知見では、より多くの対応を迫られることがより多くのストレスを感じるとされている。

ところで、家族関係の質という視点では、家族のメンバーが互いに協力し合い、支えあう関係が築かれているほど、家族はより高次元での適応を達成することができるということは家族療法などの分野でよく知られている。例えば、安田 (1991) は、障害児の療育活動において母親が障害児に関わりすぎることによって他の家族メンバーや障害児自身にも二次的な問題を付加してしまうという悪循環に注目して子どもの療育と平行して父親や兄弟の協力を要請したり、家族全体の機能性に配慮するという家族療法的なアプローチをすることの重要性を示している。

そして、Olson and Barnes (1985) は「機能的な家族は良好なコミュニケーションスキルを有しており、成員はその状態に満足している」とし、家族機能は凝集性と適応性の 2 軸からなり、2 軸の中心に位置する家族が均整のとれた状態であるという円環モデルを提唱している。凝集性とは家族の絆のようなものであり、適応性とは家族の危機に対する適応能力のようなものであるとしている。Olson らは、この 2 つの指標を用いて FACES (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales) を開発した。田村 (1993) は、FACES がアメリカにおいて作成されたことに留意して円環モ

デルと FACES 質問紙の日本文化への適用可能性を検証した。その結果、信頼性においてはクロンバッハ係数が質問紙の信頼性として一応の目安とされている $\alpha=0.6$ を超えていたので内的一貫性において十分な信頼性が得られ、内容的な妥当性においても安定していることを述べている。草田 (1995) においても日本語版 FACES-III の凝集性因子と適応性因子の因子妥当性が一応確認され、また、信頼性においても 2 因子とも安定していた。しかし家族臨床場面で、健康群と臨床群との弁別機能においては良好な結果は得られず弁別的妥当性においては支持されなかった。また、貞木・榎野・岡田 (1992) は、日本語版 FACES-III と精神的健康状態を簡便に評価できる質問紙を並行して実施したところ、精神的な自覚症状が高いほど家族機能のバランスが悪く、自覚症状が低いほど家族機能のバランスがよいことを記述している。ただし、FACES-III の活用には限界があるために十分注意することが必要だとの危険性についての数々の指摘があることも事実である。

これまでの研究では障害児を持つ母親と健常児を持つ母親のストレスについての研究は、見解が一致せず一般化が困難な現状はあれども数多くの研究がなされてきた。だがその点、障害児を持つ母親同士の要因についての研究はそれほど多く研究されてきたわけではない。また、家族機能との関係においても田中 (1996) が障害児を持つ家族と健常児を持つ家族との間で家族機能とストレスとの関連を分析した研究が見られるが、それでもまだ十分とは言えない。さらには、障害児を持つ母親の障害児の加齢にともなうストレスの量的な分析や質的な分析も過去の研究によると横断的な手法によるものが多いが、数も大変少なく実証性に乏しいこともまた事実である。

そこで本研究では、障害児を持つ母親を対象にして肢体不自由児を持つ母親と知的障害児を持つ母親を比較することで障害の違いによってどのような要因がストレスに影響を与えているかということを家族機能の視点からも含めて分析し、また障害児の加齢においてどのようなストレスの量的な変化があるのか調査することを目的とする。

【方 法】

1. 調査対象

F 県下の F 市立 I 養護学校（肢体不自由児養護学校）、F 市立 T 養護学校（知的障害児養護学校）で、教育指導を受けている障害児を持つ母親、合計 180 家族を対象とした。内訳は、F 市立 I 養護学校が 110 家族で F 市立 T 養護学校が 70 家族となっていた。

2. 調査手続き

障害児を持つ母親に、各養護学校の学校長および担任を通じ調査用紙を配布した。配布方法と回収方法はどちらも郵送としたが、F 市立 I 養護学校に 70 部を配布し回収数は 61 部（87.1%）、無回答などを除く有効回答数は、59 部（84.3%）であった。そのうち小学部に障害児を持つ母親は 36 名で、中学部に障害児を持つ母親は 13 名で、高等部に障害児を持つ母親は 10 名であった。また、F 市立 T 養護学校に 110 部を配布し回収数は 95 部（86.4%）、無回答などを除く有効回答数は、83 部（75.7%）であった。そのうち小学部に障害児を持つ母親は 20 名で、中学部に障害児を持つ母親は 23 名で、高等部に障害児を持つ母親は 40 名であった。また、調査期間は、1998 年 5 月～9 月であった。肢体不自由児を持つ家族では母親の平均年齢が 40.5 歳（4.36）であり、子どもの平均年齢が 11.4 歳（3.46）であった。また、知的障害児を持つ家族では母親の平均年齢が 43.6 歳（5.63）であり、子どもの平均年齢が 13.9 歳（3.64）となった。

3. 調査内容

1) 個人的背景要因：障害を持っている子どもの年齢、障害の内容（あるいは医師による診断名）、療育手帳の有無、身体障害者手帳の有無、障害児を持つ母親の年齢、母親の職業などについて回答してもらった。

2) 家族イメージ法：相模（1997）が家族イメージを調査するために使

用した SD 法尺度12項目 6 段階尺度を用い、それぞれの家族の母親が持つ家族イメージを測定して 6 段階で評価した。評価の得点化においては、それぞれ 1・2・3・4・5・6 の評価に対して 1 点・2 点・3 点・4 点・5 点・6 点を配点することとした。

3) 家族機能：Olson, D. H. (1985) らが作成した FACES (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales) II, III を田中 (1996) が選出した凝集性尺度14項目 6 段階尺度と、適応性尺度 8 項目 6 段階尺度を用いた。いずれの項目も、障害児を持つ母親が家族をどのように認知しているかを「まったくあてはまらない～ひじょうによくあてはまる」の 6 段階で評価した。

4) 母親のストレス：田中 (1996) が QRS 日本語版を参考にして選出した10項目 6 段階尺度を用いた。いずれの項目も、障害児を持つ母親がどのようなストレスを認知しているかを「まったくあてはまらない～ひじょうによくあてはまる」の 6 段階で評価した。

【結 果】

1. 各尺度の信頼性と因子構造

家族イメージ尺度の信頼係数は $\alpha=.950$ であり、FACES の信頼性係数は $\alpha=.915$ であり、また、QRS の信頼係数は $\alpha=.800$ であったため、本調査では、すべての項目を採用した。

F 市立 I 養護学校（肢体不自由児群）と F 市立 T 養護学校（知的障害児群）の両群の因子構造を調べるために FACES について因子分析（主成分分解－Varimax 回転）を行い、固有値 1 以上を因子として抽出した結果、肢体不自由児群と知的障害児群の両群ともに 4 因子構造をなしていた（Table 1 A～B）。

両群とも、質問項目の 1. 2. 3. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 15. 16. 18. 19.

Table 1 A) 肢体不自由児を持つ母親の家族機能の因子分析結果

項 目	Factor 1	Factor 2	Factor 3	Factor 4	共通性
1. 私の家ではみんなが自分の考えをはっきりと口に出して言いやすい。	0.781	0.093	-0.213	-0.204	0.706
2. 家族で決めたことはみんなで守る。	0.639	0.447	0.027	-0.199	0.649
3. 私の家族は暖かく明るい感じがする。	0.727	0.336	-0.076	-0.292	0.734
4. いったん家族のものがそれぞれの果たすべき役割を決めると、後でそれをかえるのは難しい。	0.004	0.022	0.888	-0.111	0.802
5. 私の家には、ルールがあるのかははっきりしない。	-0.151	-0.005	-0.021	0.855	0.753
6. 私の家庭は私が望む雰囲気をはっきりも備えていた。	0.779	0.107	-0.008	-0.071	0.624
7. 私の家族には連帯感がある。	0.612	0.392	-0.245	-0.167	0.617
8. 家の中では、何でも話ができる。	0.767	0.179	-0.116	-0.387	0.781
9. 私の家ではお互いの役割分担がはっきりしている。	0.603	-0.132	0.279	0.354	0.585
10. 家族は私の言っている意味をはば正確にとらえる。	0.817	0.022	-0.018	0.124	0.684
11. 私の家族はお互いにとってもうまくいっていると思う。	0.856	0.108	0.049	0.003	0.747
12. 私の家ではお互い自分の好きなことができる。	0.339	0.287	-0.456	0.069	0.411
13. 私の家ではいったんこうと決めたことを変えるのは難しい。	-0.008	0.287	0.821	0.106	0.717
14. 時間をきちんと守ることは、私の家族では重視されている。	-0.015	0.867	0.141	0.131	0.788
15. 私の家庭は、私が心のよりどころにできる場所である。	0.852	0.074	-0.215	-0.003	0.778
16. 私と家族の気持ちはよく合っている。	0.876	-0.002	-0.094	-0.011	0.777
17. 私の家にはしっかりと決まりはない。	-0.098	0.096	-0.041	0.839	0.725
18. 私は問題が起こったときにはいつも家族を頼りにする。	0.791	-0.141	-0.174	-0.211	0.721
19. 私の家族は、お互い十分な関心を持って接している。	0.872	0.121	-0.173	-0.044	0.807
20. 私の家族の中では、決まりを守ることがとても大切にされている。	0.748	0.114	0.361	-0.002	0.703
21. 家族は私の気持ちをよく理解してくれている。	0.821	-0.028	0.116	-0.102	0.698
22. 家族の者は私の悩みを分かっているで励ましてくれる。	0.763	-0.012	0.034	-0.279	0.662
説 明 分 散	9.73	1.48	2.16	2.11	
累積説明率 (%)	46.1	51.9	62.1	70.4	

Table 1 B) 知的障害児を持つ母親の家族機能の因子分析結果

項 目	Factor 1	Factor 2	Factor 3	Factor 4	共通性
1. 私の家ではみんなが自分の考えをはっきりと口に出して言いやすい。	0.753	-0.108	0.093	0.002	0.588
2. 家族で決めたことはみんなで守る。	0.644	0.053	0.439	-0.341	0.732
3. 私の家族は暖かく明るい感じがする。	0.787	0.229	0.055	0.021	0.676
4. いったん家族のものがそれぞれ果たすべき役割を決めると、後でそれをかえるのは難しい。	0.028	0.021	0.821	0.271	0.749
5. 私の家には、ルールがあるのかはっきりしない。	0.022	0.011	0.175	0.801	0.673
6. 私の家庭は私が望む雰囲気をはばいつも備えていた。	0.599	0.454	0.102	0.151	0.599
7. 私の家族には連帯感がある。	0.829	0.079	0.115	-0.134	0.725
8. 家の中では、何でも話ができる。	0.781	0.054	0.012	0.241	0.672
9. 私の家ではお互いの役割分担がはっきりしている。	0.295	0.538	0.411	-0.284	0.628
10. 家族は私の言っている意味をほぼ正確にとらえる。	0.638	0.519	0.012	-0.069	0.681
11. 私の家族はお互いにとってもうまくいっていると思う。	0.862	0.088	0.017	-0.012	0.752
12. 私の家ではお互い自分の好きなことができる。	0.641	0.043	0.139	0.223	0.481
13. 私の家ではいったんこうと決めたことを変えるのは難しい。	-0.098	0.303	0.719	0.151	0.641
14. 時間をきちんと守ることは、私の家族では重視されている。	0.083	0.853	-0.082	-0.005	0.741
15. 私の家庭は、私が心のよりどころにできる場所である。	0.852	0.201	0.015	-0.034	0.768
16. 私と家族の気持ちはよく合っている。	0.845	0.132	-0.007	-0.096	0.741
17. 私の家にはしっかりと決まりはない。	0.031	-0.125	0.121	0.826	0.714
18. 私は問題が起こったときにはいつも家族を頼りにする。	0.657	0.369	-0.182	-0.103	0.611
19. 私の家族は、お互い十分な関心を持って接している。	0.761	0.301	-0.146	-0.079	0.697
20. 私の家族の中では、決まりを守ることがとても大切にされている。	0.233	0.757	0.165	-0.069	0.661
21. 家族は私の気持ちをよく理解してくれている。	0.799	0.264	0.009	-0.033	0.711
22. 家族の者は私の悩みを分かっている励ましてくれる。	0.744	0.319	0.139	0.022	0.671
説 明 分 散	8.63	2.72	1.81	1.75	
累積説明率 (%)	43.8	53.8	61.5	67.3	

21. 22. において強い因子負荷量を示していた。そこでこれらの質問項目を第 1 因子とした。そして質問項目の 14 について、また質問項目の 4. 13. について、質問項目 5. 17. については、それぞれ第 2 因子、第 3 因子、第 4 因子とした。

しかし、質問項目の 9. 私の家ではお互いの役割分担がはっきりしている。20. 私の家族の中では、決まりを守ることがとても大事にされている。の 2 項目においては両群それぞれが異なる意味を持つと認知されているため、両群の家族認知の差として考察することとする。

なお、第 1 因子には家族の中で暖かい感じがしたり家族間の気持ちが合っていたり連帯感について説明しているところからこの因子を「充実した家族の連帯感」と命名し、第 2 因子には、家族のあいだで時間などの決まりごとを守ることについて説明しているところからこの因子を「家族のあいだの決まりごとを守る大切さ」と命名し、第 3 因子には、いったん家族のあいだで決めたことはなかなか変更されるのが困難であるというような比較的ネガティブなものを説明しているところからこの因子を「家族のあいだの融通のきかなさ」と命名し、第 4 因子には、家族間でのはっきりとした決まりごとがないことを説明しているところからこの因子を「家族のあいだの自由な雰囲気」とそれぞれ命名した。

また、同様に母親のストレスの因子構造を調べるために QRS 日本語版にも因子分析（主成分分解－Varimax 回転）を行い、固有値 1 以上を因子として抽出した結果、肢体不自由児群と知的障害児群の両群とも 2 因子構造をなしていた (Table 2 A～B)。

両群とも、質問項目の 4. 5. 6. 7. 8. 9. においてかなりの因子負荷量を示していたのでこれらの質問項目を第 1 因子とした。また、質問項目の 1. 2. 3. 10. においても同様にかかなりの因子負荷量を示していたのでこれらの質問項目を第 2 因子とした。母親のストレス構造においては両群ともに同型の因子構造を示していた。

なお、第 1 因子には障害児を家族に持っていることで自分自身の自己実

Table 2 A) 肢体不自由児を持つ母親のストレスの因子分析結果

項	目	Factor 1	Factor 2	共通性
1.	自分の子を比べられるので親戚の家へ遊びに行きにくい。	0.006	0.939	0.883
2.	親戚へ自分の子連れて遊びに行くにあまよい顔をされない。	0.047	0.942	0.891
3.	自分の悩みを話せる友達がいないのでさびしい。	0.428	0.498	0.432
4.	夫婦でゆっくり時間が持たなくて、物足りない。	0.777	-0.004	0.604
5.	自分の子で悩んでいても、夫はあまり気を配ってくれないので不満である。	0.825	0.184	0.715
6.	夫が自分の子のことを話題にしたがらないのが不満である。	0.701	0.307	0.587
7.	ちょっとした自分の時間が欲しくてもなかなか思うように取れない。	0.667	0.122	0.459
8.	働きに出たりしたいと思うが、我が子のこともあり、できそうに無い。	0.624	0.046	0.391
9.	自分の子が家で騒いでいると、うっとうしく思うことがある。	0.531	0.345	0.401
10.	自分の子は危険なことを平気でするのでハラハラさせられる。	0.308	0.547	0.394
説明分散		3.17	2.58	
累積説明率 (%)		33.5	50.2	

Table 2 B) 知的障害児を持つ母親のストレスの因子分析結果

項	目	Factor 1	Factor 2	共通性
1.	自分の子を比べられるので親戚の家へ遊びに行きにくい。	0.148	0.878	0.793
2.	親戚へ自分の子を連れて遊びに行くにあまりいい顔をされない。	0.082	0.904	0.825
3.	自分の悩みを話せる友達がいないのでさびしい。	0.011	0.663	0.441
4.	夫婦でゆっくり時間が持たなくて、物足りない。	0.714	0.131	0.527
5.	自分の子のことで悩んでいても、夫はあまり気を配ってくれないので不満である。	0.741	0.087	0.557
6.	夫が自分の子のことを話題にしたがらないのが不満である。	0.726	0.299	0.617
7.	ちょっととした自分の時間が欲しくもなかなか思うように取れない。	0.698	0.122	0.502
8.	働きに出たりしたいと思うが、我が子のこともあり、できそうに無い。	0.617	0.028	0.381
9.	自分の子が家で騒いでいると、うっとうしく思うことがある。	0.628	-0.037	0.396
10.	自分の子は危険なことを平気でするのでハラハラさせられる。	0.298	0.302	0.181
説 明 分 散		2.97	2.25	
累積説明率 (%)		41.2	58.2	

現を阻害された状態にあったり、夫婦関係に関することを説明していることからこの因子を「家庭内から生ずるストレス」と命名し、第2因子には障害児を家族に持っていることによって社会環境から受けるストレスや、また社会環境に対する物足りなさについて説明していることからこの因子を「家庭外から生ずるストレス」と命名した。

2. 肢体不自由児群と知的障害児群の両群間の比較

1) 両群間の家族イメージの比較

家族イメージ法で得られた得点の両群間での平均値比較をするため、あらかじめF検定を行い分散の等質性を調査してからt検定を行った。その結果、項目11.〈貧しい－豊かな〉の質問項目において肢体不自由児群の方が知的障害児群より有意に豊かな家族イメージを母親が持っているということを示した ($t[140]=2.387, p<.01$)。また、項目12.〈固い－柔らかい〉の質問項目において肢体不自由児群の方が知的障害児群より、有意に柔らかい家族イメージを母親が持っているという傾向があることを示した ($t[140]=1.861, p<.10$)。それ以外の項目については、有意な差は見られな

Table 3 A) 障害児群での家族イメージの平均値とその検定結果

形 容 詞 対	肢体不自由児群	知的障害児群	検定結果
1 冷たい－暖かい	4.51 (1.07)	4.48 (1.09)	n.s
2 自信のない－自信のある	4.06 (1.04)	4.05 (0.95)	n.s
3 味気のない－魅力的な	4.19 (0.99)	4.11 (1.08)	n.s
4 信頼できない－信頼できる	4.68 (0.98)	4.62 (1.07)	n.s
5 萎縮した－伸び伸びした	4.63 (1.05)	4.44 (1.13)	n.s
6 嫌いな－好きな	4.74 (1.08)	4.51 (1.16)	n.s
7 孤立した－連帯した	4.44 (1.04)	4.43 (1.18)	n.s
8 気まずい－気楽な	4.68 (1.08)	4.52 (1.01)	n.s
9 無気力な－意欲的な	4.38 (1.05)	4.24 (1.06)	n.s
10 つまらない－楽しい	4.61 (1.07)	4.41 (1.14)	n.s
11 貧しい－豊かな	4.49 (1.02)	4.05 (1.12)	**
12 固い－柔らかい	4.59 (1.01)	4.27 (0.98)	+

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.005$

かった (Table 3 A)。

2) 両群間の FACES の因子別比較と QRS 日本版の因子別の比較

t 検定を行った結果 (Table 3 B), FACES の第 1 因子から第 4 因子の因子別の平均得点差は有意ではなかった。また, QRS 日本版では, 第 1 因子である「家庭内から生ずるストレス」においては知的障害児群の方が肢体不自由児群より有意に家庭内から生じるストレスを感じている傾向があることを示した ($t [140] = 1.831, p < .10$)。そして, 第 2 因子である「家庭外から生ずるストレス」において知的障害児群の方が肢体不自由児群より有意に家庭外から生ずるストレスを感じているということを示した ($t [140] = 1.977, p < .05$)。そして, QRS 日本版全体の合計得点の平均得点の差は知的障害児群の方が肢体不自由児群より有意に家庭内・外から生ずるストレスを感じていることを示していた ($t [140] = 1.985, p < .05$)。

Table 3 B) 障害間での家族機能の因子別の平均値とその検定結果

	因 子 名	肢体不自由児群	知的障害児群	検定結果
第 1 因子	充実した家族の連帯感	61.5 (12.7)	62.9 (13.2)	n.s
第 2 因子	家族の間の決まりごとを守る大切さ	3.78 (1.22)	4.07 (1.17)	n.s
第 3 因子	家族の間の融通のきかなさ	5.85 (1.83)	5.94 (1.97)	n.s
第 4 因子	家族の間の自由な雰囲気	6.61 (2.12)	6.53 (2.12)	n.s

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .005$

障害間でのストレスの因子別の平均値とその検定結果

	因 子 名	肢体不自由児群	知的障害児群	検定結果
第 1 因子	家庭内から生ずるストレス	16.2 (6.28)	17.6 (6.49)	+
第 2 因子	家庭外から生ずるストレス	8.44 (4.04)	9.75 (3.77)	*
	全体のストレス	24.6 (9.01)	27.3 (8.58)	*

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .005$

3) 母親のストレスと家族機能と家族イメージ

母親のストレスと家族機能と家族イメージの関係を分析するに際して、母親のストレスの総得点をもとにして分析することとした。まず、分析をするにあたって両群のストレス得点に注目して、それぞれの群からストレス合計得点の高得点者（上位25%）の高ストレス群とストレス合計得点の低得点者（下位25%）の低ストレス群を抽出した。

そして、これら高ストレス群と低ストレス群間の家族イメージと FACES の平均得点の差を比較するために t 検定を行った。

その結果、肢体不自由児群では家族イメージの平均得点の差が項目 1. 〈冷たい－暖かい〉 ($t[33]=4.512, p<.01$)、項目 2. 〈自信のない－自信のある〉 ($t[33]=3.457, p<.01$)、項目 3. 〈味気ない－魅力的な〉 ($t[33]=3.052, p<.01$)、項目 4. 〈信頼できない－信頼できる〉 ($t[33]=3.071, p<.01$)、項目 5. 〈萎縮した－伸び伸びした〉 ($t[33]=3.261, p<.01$)、項目 6. 〈嫌いな－好きな〉 ($t[27]=2.787, p<.01$)、項目 7. 〈孤立した－連帯した〉 ($t[33]=2.276, p<.05$)、項目 9. 〈無気力な－意欲的な〉 ($t[33]=2.677, p<.05$)、項目 10. 〈つまらない－楽しい〉 ($t[33]=2.199, p<.05$)、項目 11. 〈貧しい－豊かな〉 ($t[33]=3.183, p<.01$)、項目 12. 〈固い－柔らかい〉 ($t[33]=2.269, p<.05$) のそれぞれの項目とも低ストレス群の方が高ストレス群より有意にポジティブな家族イメージを母親が持っていることを示した。また、項目 8. 〈気まずい－気楽な〉では平均得点の差は有意ではなかった。

また、FACES の因子別の平均得点差は、第 1 因子である「充実した家族の連帯感」では低ストレス群の方が高ストレス群より有意に充実した家族の連帯感を母親が認知していることを示した。($t[33]=3.604, p<.001$)。第 2 因子である「家族のあいだの決まりごとを守る大切さ」では平均得点の差は有意ではなかった。第 3 因子である「家族のあいだの融通のきかなさ」では高ストレス群の方が低ストレス群より有意に家族のあいだのネガティブな融通性のなさを示した ($t[26]=3.399, p<.01$)。第 4 因子である

「家族のあいだの自由な雰囲気」では平均得点の差は有意ではなかった (Table 4 A～B)。

知的障害児群では、家族イメージの平均得点の差が項目 4. 〈信頼できる－信頼できない〉 ($t[44]=1.818, p<.10$), 項目 7. 〈孤立した－連帯した〉 ($t[42]=1.884, p<.10$), 項目 10. 〈つまらない－楽しい〉 ($t[45]=1.941, p<.10$) の項目について低ストレス群の方が高ストレス群より有意にポジティブな家族イメージを母親が持っている傾向を示した。しかしそれ以外の項目では平均得点差は有意ではなかった。

Table 4 A) 肢体不自由児群の高ストレス群と低ストレス群での家族イメージの平均値とその検定結果

形 容 詞 対	高ストレス群	低ストレス群	検定結果
1 冷たい－暖かい	4.05 (0.85)	5.27 (0.75)	**
2 自信のない－自信のある	3.55 (0.88)	4.61 (0.92)	**
3 味気のない－魅力的な	3.91 (0.87)	4.77 (0.81)	**
4 信頼できない－信頼できる	4.32 (0.85)	5.33 (0.77)	**
5 萎縮した－伸び伸びした	4.41 (0.99)	5.38 (0.77)	**
6 嫌いな－好きな	4.55 (1.11)	5.44 (0.71)	**
7 孤立した－連帯した	4.32 (1.18)	5.01 (0.77)	*
8 気まずい－気楽な	4.61 (1.16)	5.22 (1.01)	n.s
9 無気力な－意欲的な	3.97 (1.11)	4.94 (1.05)	*
10 つまらない－楽しい	4.51 (1.06)	5.22 (0.87)	*
11 貧しい－豊かな	4.08 (1.07)	5.16 (0.92)	**
12 固い－柔らかい	4.41 (0.98)	5.11 (0.83)	*

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.005$

Table 4 B) 肢体不自由児群の高ストレス群と低ストレス群での家族機能の因子別の平均値とその検定結果

因 子 名	高ストレス群	低ストレス群	検定結果
第 1 因子 充実した家族の連帯感	56.9 (9.23)	69.4 (11.1)	***
第 2 因子 家族の間の決まりごとを守る大切さ	3.56 (1.17)	4.11 (1.22)	n.s
第 3 因子 家族の間の融通のきかなさ	6.47 (1.01)	4.75 (1.88)	**
第 4 因子 家族の間の自由な雰囲気	7.29 (2.47)	6.02 (1.72)	n.s

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.005$

また、FACESの因子別の平均得点差は、第1因子である「充実した家族の連帯感」では低ストレス群の方が高ストレス群より有意に充実した家族の連帯感を母親が認知していることを示した ($t[49]=2.837, p<.01$)。しかし、第2因子である「家族のあいだの決まりごとを守る大切さ」や第3因子である「家族のあいだの融通のきかなさ」や第4因子である「家族のあいだの自由な雰囲気」については平均得点の差は有意ではなかった (Table 5 A～B)。

Table 5 A) 知的障害児群の高ストレス群と低ストレス群での家族イメージの平均値とその検定結果

形 容 詞 対	高ストレス群	低ストレス群	検定結果
1 冷たい－暖かい	4.33 (1.37)	4.77 (0.91)	n.s
2 自信のない－自信のある	3.94 (1.11)	4.21 (0.92)	n.s
3 味気のない－魅力的な	3.98 (1.99)	4.41 (0.87)	n.s
4 信頼できない－信頼できる	4.31 (1.33)	4.87 (0.83)	+
5 萎縮した－伸び伸びした	4.46 (1.33)	4.87 (0.88)	n.s
6 嫌いな－好きな	4.51 (1.45)	4.79 (0.86)	n.s
7 孤立した－連帯した	4.18 (1.43)	4.79 (0.82)	+
8 気まずい－気楽な	4.46 (1.17)	4.75 (0.75)	n.s
9 無気力な－意欲的な	4.01 (1.19)	4.45 (0.87)	n.s
10 つまらない－楽しい	4.14 (1.42)	4.79 (0.92)	+
11 貧しい－豊かな	3.85 (1.04)	4.04 (1.07)	n.s
12 固い－柔らかい	4.14 (1.26)	4.41 (0.96)	n.s

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.005$

Table 5 B) 知的障害児群の高ストレス群と低ストレス群での家族機能の因子別の平均値とその検定結果

因 子 名	高ストレス群	低ストレス群	検定結果
第1因子 充実した家族の連帯感	57.35 (15.8)	68.54 (11.7)	**
第2因子 家族の間の決まりごとを守る大切さ	1.55 (1.24)	1.47 (1.21)	n.s
第3因子 家族の間の融通のきかなさ	6.11 (1.57)	4.61 (2.14)	n.s
第4因子 家族の間の自由な雰囲気	6.94 (1.97)	6.47 (2.46)	n.s

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.005$

4) 障害児の加齢にともなう母親のストレスの推移

障害児を家族に持っている母親のストレスの時間的な推移を分析するためにデータを小学部・中学部・高等部の 3 水準に分けた時間的推移の要因を独立変数として肢体不自由児群と知的障害児群のそれぞれにおいて QRS 日本版の各因子別と合計得点を従属変数とした 1 要因分散分析を行った。その結果、第 1 因子である「家庭内から生じるストレス」については時間的推移の要因についての有意な主効果は示さなかった。また、第 2 因子である「家庭外から生じるストレス」についても時間的な推移の要因については有意な主効果を示さなかった。そしてストレス全体の合計得点についても時間的な推移の要因については有意な主効果は示さなかった。

【考 察】

因子分析の結果において、田中（1996）では凝集性因子と、適応性因子との 2 因子構造を示していたが、本研究では 4 因子構造を示していた。凝集性尺度においては、田村（1993）；草田（1995）；田中（1996）とほぼ同様な因子構造を示していたが、適応性尺度において先行研究とは異なる因子構造を示していた。適応性尺度とは家族が直面する状況的あるいは発達の危機に対する適応もしくは変化の能力であると理解されているが、両障害群では適応という側面では様々な認知の構造様式があることを示していた。因子の命名の段階で行ったとおり、適応という側面に「家族の間の決まりごとを守る大切さ」や、「家族の間の融通の気かなさ」や「家族の間の自由な雰囲気」という 3 つの認知の様式があることを示している。また、この結果は、適応性尺度の不安定さという点においても言及できるものとも捉えられる。そして、質問紙の中で、適応性尺度が必ずしも発達の危機に対する適応への変化能力としてだけで捉えられたのではなく障害児を持つ家族にとって決まりごとを決める難しさや、その中で決まりという規制が、逆にマイナスの方向に向かってしまうこともあることを示している。また、因子分析で因子の分類を行う際に、明らかに同じ質問項目の意味を肢体不

自由児群と知的障害児群で別々の理解のしかたをしているものが2項目あったのでこの項目については両障害群の家族認知の差として見てみる。9. 私の家ではお互いの役割分担がはっきりしている。20. 私の家族の中では、決まりを守ることがとても大切にされている。という2項目についてだが、肢体不自由児群では質問項目9. 20. を充実した家族の連帯感であると認知として知的障害児群では質問項目9. 20. を家族の決まりを守ることの大切さとして認知していた。これより推測されることは肢体不自由児群では家の中での決まりは家族の中では、よりよい家族の適応を目指す上で非常に重要であると認識していると考えられ、また、知的障害児群では、決まりを守るとは家族の関係維持のために非常に必要であるとして認識していると考えられる。これは、両障害群それぞれ家族の「決まりごと」の認知が若干異なっていることを示している。また、QRS 日本版の因子分析結果は、両障害群とも同様の因子構造を示しどちらも2因子構造になった。これは、両障害群の母親が、同じような様式でストレスを受けていることを示唆している。

また、肢体不自由児群と知的障害児群との家族イメージの差の比較においては、わずかに肢体不自由児群の方がより豊かなイメージとより柔らかいイメージをもつ傾向を示すにとどまっていた。また、家族機能の因子別の比較を行ったが第1因子から第4因子まで統計的に有意な差は見られず、両障害間の家族機能の明確な差は見られなかった。田中（1996）においては、障害児群と健常児群とのFACESの凝集性因子と適応性因子の得点の比較において健常児群の方が障害児群より有意に家族の連帯感を感じ、また、家族の決まりにがんじがらめにされていないということを示していた。しかし、草田（1995）の研究においてFACESが家族臨床場面での弁別機能を果たすには不十分であるという知見を示していたように、FACESの臨床場面適用には、ほとんどの先行研究において慎重な態度を示しており、本研究においても同様にFACESの再検討が必要ではないかという知見を示すものである。母親のストレスの因子別比較を行った結果、「家庭内から生ずる

ストレス」に関しては障害児についての傾向差が見られ、「家庭外から生ずるストレス」については有意な差が出ており、ストレス全体においても明確な差が見られた。これにより肢体不自由児群よりも知的障害児群のほうが家庭内・外からより多くのストレスを感じているということがいえる。すべての事例について当てはまるとはいえないが知的障害児については社会的な援助機関として教育・福祉といった機関に援助を受けているが、肢体不自由児については社会的な援助機関として教育・福祉のほかにも肢体不自由という障害の特性である発作などの危険性により、これらの教育・福祉といった機関に加えて医療が加わることになり、障害児を持つ母親としてもより日常生活への障害児自身のケアに費やす時間や労力が加わると考えられる。ここでは障害児を持つ家族に伴う障害児自身へのケアの困難さが大きいほど家族の適応バランスが左右されやすいという知見（渡辺，1997）とは一致しなかった。むしろ，橋本（1982）の障害の程度が重度であるほど家族はより多くの負担を強いられることが多いが，ただし，障害がかえって重度である方が早期に親の受容を引き出し，準備を促し，精神的成長を親に遂げさせる場合があるという知見と一致していた。これより，現実に目で見て我が子の障害が認識しやすいほど，開き直りの心理が働いて，より障害が軽度な障害児を持つ母親よりも現実にストレスに対する耐性が強いということが考えられる。

そして，それぞれの障害群での高ストレス群と低ストレス群の比較においては，肢体不自由児群では有意に低ストレス群が高ストレス群より充実した家族の連帯感を示しており，また，高ストレス群の方が低ストレス群より有意に家族の決まりごとによって融通性の無さを感じるという適応性のマイナス面を感じているということを示した。加えて，家族の高い凝集性が母親の家族に対するイメージをより高く認知できていることがうかがえる。また，知的障害児群でも有意に低ストレス群の方が高ストレス群より有意に充実した家族の連帯感を示していた。しかし，肢体不自由児群と異なり，知的障害児群では家族の高い凝集性が必ずしも母親の家族に対す

るイメージを高く評価させているわけではないことを示した。このことより、両障害群とも家族の連帯感を強く感じていることがストレスを低減していることから推察するに、貞木・榎野・岡田（1992）の精神的な健康状態が高いほど家族機能のバランスがよく、精神的な健康状態が低いほど家族機能のバランスが悪いという知見と同様の見解を示している。また、田中（1996）の障害児群と健常児群の両群において低ストレス群の方が高ストレス群より有意に家族の連帯感を感じているという知見と一致している。このことより、家族機能の充実がストレスの低減に大きく影響していることが考えられる。しかし、肢体不自由児群の方は、ストレスが押さえられていることが、よりポジティブな家族イメージをもつという結果に対して、知的障害児群については明確な差がないというのは知的障害児を持つ母親の家族イメージが多種多様性を示すものであると推測される。

そして、障害児の加齢にともなう母親のストレスの量的変化については、第1因子においても第2因子においてもストレス全体においても、ストレスの時間的な推移変化の要因において明確な差は見られなかった。橋本（1980）においては、肢体不自由児群と知的障害児群の2障害群間における学齢期前後のストレス推移状況を分析しているが統計的な有意な差は見られず、これによりストレスの時間的な推移においては一般化したものは適用できないとしており、障害の発生からの横断的な調査ではなく縦断的な調査が望まれるところであると述べている。本研究でも一般化については同様の見解を示すものとなった。それとともに、障害児を持つ母親のストレス推移状況の研究については多種多様な要因が作用していると考えられるので、さらに多岐にわたる実証的研究の必要性があり一般化についてはそれからでも遅くはないと思われる。

本研究の結果より、障害児に対する援助や施策については、障害児本人対してのみに限定することなく、まわりの家族に対する配慮が非常に重要であることが示唆された。障害児を含めた家族全体が一致団結できており、種々のライフイベントにおいて柔軟性を示せることが日々のストレスを低

減できるという可能性が示されたことから障害児臨床に携わるものは家族という大きな視点での援助手段をこうじるべきではないだろうか。障害児を持つ母親の研究はその数を着実に増やしてきてはいるが、実証的研究という点においては、まだまだ不足しているのが現状である。また、家族という視点においての実証的研究はまだまだ未開の部分が多く残しており今後さらに綿密な調査と分析が必要になってくると思われる。

【引用文献】

- Erickson and Upshur (1989) Caretaking burden and social support: Comparison of mother of infants with and without disabilities. *American Journal on Mental Retardation*, 94(3), 250-258.
- Friedrich, W. N.・Greenberg, M. T. and Crnic, K. (1983) A short-form of the Questionnaire on Resources and Stress. *American Journal of Mental Deficiency*, 88(1) 41-48.
- 橋本厚生(1980): 障害児を持つ家族のストレスに関する社会学的研究—肢体不自由児を持つ家族と精神薄弱児を持つ家族の比較を通して— 特殊教育学研究, 17(4), 22-31.
- 橋本厚生(1982): 社会的ストレスから見た障害児・者のいる家族発達段階とその関連要因についての研究 長野大学紀要, 4(1.2), 79-109.
- Holroyd and McArthur (1976) Mental Retardation and Stress on the Parents. A contrast between Down's Syndrome and child autism. *American Journal of Mental Deficiency*, 80, 431-436.
- 稲波正充・Catherine Rodgers・小椋たみ子・西信高(1994): 障害児を育てる母親のストレスについて 特殊教育学研究, 32(2), 11-21.
- 木船憲幸・深田博己(1977): 心身障害児の親子関係に関する発達的研究 福岡教育大学紀要, 27(4), 165-176.
- 北川憲明・七木田敦・今塩屋隼男(1995): 障害幼児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響 特殊教育学研究, 33(1), 35-44.
- 倉重由美・川間健之助(1995): 障害児・者を持つ母親の障害受容尺度 山口大学教育学研究論叢, 45(3) 297-316.
- 倉重由美・川間健之助(1996): 障害児・者を持つ母親の障害受容—障害受容に影響を与える要因の検討— 山口大学教育学研究論叢, 46(3), 19-29.
- 草田寿子(1995): 日本版 FACES III の信頼性と妥当性の研究の検討 カウンセリング研究, 28(2), 154-162.

清水・海塚：障害児援助における家族の重要性について

- 三牧孝至（1998）：障害児と家族への支援 保健の科学, **40**(4), 304-307.
- 中野孝子（1993）：家族ストレスに関する基礎研究—心身障害児を持つ親のストレス— 関西学院大学教育学科研究年報, **19**, 69-84.
- 新美明夫・植村勝彦(1981)：就学前の心身障害幼児をもつ母親のストレス-健常幼児の母親との比較— 発達障害研究, **3**(3), 206-215.
- 新美明夫・植村勝彦（1984）：学齢期心身障害児を持つ父母のストレス—ストレスの構造— 特殊教育学研究, **22**(2), 1-11.
- 及川克紀・清水貞夫（1995）：障害児を持つ家族の問題-家族研究の問題と課題-発達障害研究, **17**(1), 54-61.
- Olson, D. H. and Barnes, H. L（1985） Parent Adolescent Communication and the Circumplex Model. *Child Development*, **56**, 438-447.
- 貞木隆志・榎野 潤・岡田弘司（1992）：家族機能と精神的健康 心理臨床学研究, **10**(2), 74-79.
- 相模健人（1997）：青年期における現在及び未来の家族イメージに関する研究 家族心理学研究, **11**(1), 27-41.
- 田中正博（1996）：障害児を育てる母親のストレスと家族機能 特殊教育学研究, **34**(3), 23-32.
- 田村 毅（1993）：日本人家族の適応力と凝集性に関する予備研究 東京学芸大学紀要, **45**(6), 135-145.
- 植村勝彦・新美明夫(1985)：発達障害児の加齢にともなう母親のストレスの推移 心理学研究, **56**(4), 233-237.
- 渡辺顕一郎（1997）：心身障害児者をメンバーに持つ家族のストレスとその要因 四国学院大学論集, **95**, 195-214.
- 安田 勉（1991）：発達障害児のファミリーケースワーク—家族療法的アプローチ— 弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要, **27**, 31-39.

Summary

The Significance of Family Support for Children with Disabilities

Kenji Shimizu and Toshiro Kaizuka

This study examined the significance of family support for children with disabilities. The contents of questionnaires were images of family (12-items) and Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales (22-items) and Questionnaire on Resources and Stress (10-items). The subjects were mother whose children with intellectually retarded or physically handicapped. The results were as follows: The group of mothers of intellectually retarded children was experienced more stresses than another group. And both of group the higher level of bond of family, the less experienced stresses. These results suggest the significance of family support for children with disabilities.